ＡＰ：０

uturu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＡＰ：０

【Ｎコード】

Ｎ２６５７ＢＡ

【作者名】

ｕｔｕｒｕ

【あらすじ】

もしも日本人がチートを持って異世界に行ったら

01

朝起きたら、そこは見知らぬ家だった。

「どこだ、此処？　」

つい口から吐き出される疑問。余りに衝撃で、内に思っていたことが外に出てしまったようだ。

ぼろっちい木の家の中を上下左右と見渡す。が、やはりというか当然というべきか、全く知らない場所である。

取り敢えず、ベットから降りて床に立つ。あれ？　なんか可笑しい。世界が狭くなった気がした。なんだろう。言葉では言い表せないような違和感が俺を絡み付ける。

向かい側にあるドアへ歩こうと、足を一歩前に出す。すると、俺の身体が揺れた。ぐわん、ぐわんと。重心の定まらない高層ビルのように、ぐらぐら。

「うわっ」

情けない悲鳴を上げて、俺は大地とキスをする。

痛い。なんだよ、これ。

まるで始めて自分の身体で歩く幼児のように、俺は立って歩くという行為にバランスを保つことが出来なかった。

ひりひりと痛む顔面を右手で押さえて、もう一度地面に立って歩く。……あれ？　やっぱり何かが何時もと違う。俺は普通に歩いているだけだというのに、何故こんなにも恐怖心を感じているんだ？

ぐらぐら揺れる身体。くそっ。

このままだとまた倒れてしまいそうなので、床に座り込む。

一体、俺の身に何が起こったんだ。

膝を床に着けまま、ドアの元まで歩く。上半身をピンと張って、ドアノブに手を伸ばすが届かない。なんだよ。ドア大き過ぎ……。立ってから、ドアノブを捻る。

ギギギ、と鈍い音を立てて開くドア。ノブに入れた力が弱かった

ようで中途半端に開いたドアの隙間から、部屋の外の景色を覗き見る。
「――は？」
其処は森だった。焦げ茶色の樹木と大地。色鮮やかな緑の葉っぱ。普通に森だった。なんなんだ。なんで家の外に森があんだよ。訳わかんねえ。此処はアフリカか何処かですか。
期待と違う外の景色に八つ当たりしながら、もう一度立ってドアを閉める。
「はぁ」
赤ん坊の歩くそれのようにして、ベットまで戻る。あー。意味分からん。何が一体、どうなってるんだよ。
ベットに寝転がる。夢とか、そんな感じなのかこれは。木で造られた建物を眺めながら、ボンヤリと考える。寝起きだというのに、不思議と頭は冴えている。考えよう。よく分からない事態であるが、落ち着いて考えれば必ず解決法は見つかる筈だ。
先ずは、今の状況の整理から。
――起きたら知らない家だった。
――上手く歩けない。
――ドアが異常に大きく感じる。
――家の外は、ジャングル。
――そしてこれは今気が付いたことが、俺はかなり厚着をしている。いつの間にか服が変わっていたのだ。
これらから導き出される答えは、“此処は平均身長が日本より高い外国の森の中で、俺は拉致られてこの家に連れて来られた”ということになる。
最も今の手掛かりが少ない状況の中で、明瞭な答えは出せない。そのような考えもある程度に留めておくべきか。
だとしたら、今他にすべきことは家の捜索と外に出て人を探すこと。
歩くことが何故か困難なので、先ずは家の捜索からだ。

ベットから降りて、先程部屋を見渡した際に目に付いた衣装棚を開ける。あったのは、フード付きのコートと鞘に入った刀だった。
おいおい、マジか。刀って。なんて物騒な物があるんだよ。
手にとって確かめてみると、……重い。刀が本物がどうか見分ける方法の一つに、重さがどうとかいう話を聞いたことがある。だとしたら、これは本物か。刀を抜くと、人とか普通に切れそうな刃が出てきた。
駄目だ。リアル過ぎ。危険そうだから、一旦スルーしておこう。
刀を棚の奥に閉まって、コートを取り出す。黒と紺色を基調としたそれは、トレンチコートのようで丈が長い。漫画や映画でラスボスが被ってそうな感じだった。ポケットに何かないか調べてみるが、何もない。コートを棚に戻して、衣装棚のドアを閉める。
後あるのは、机だが……。見るだけで何も無さそうだと分かるから、あれはいいか。ってあれ？　じゃあ家の捜索はこれで終わりか。案外早いな。5分掛かってないぞ。本当に何もない部屋だ。余りにも何も何もなさ過ぎて逆に不自然だが、まあいい。今の状況からしてちょっとやそっとおかしいくらいじゃ大したことない。問題は家の外。
仮に人がいるとするなら、日本語が通じないとしても英語圏ならなんとかなる。世界で二番目に国と地域で使われているなら、それに賭ける価値は十分ある。
行ってみるか。本当は何があるのか全く分からないジャングル染みた場所になんて行きたくないが、このままこの家に居ても意味が無いし。
衣装棚に戻って、刀とコートを取り出す。もしかしたら野生のワニとかトラみたいな危険や肉食獣がいるかもしれないし、その対策として刃物はあった方がいい。本当は銃があれば一番良かったのだけれど、この際文句は言えない。むしろ、刀があったことに感謝すべき。流石に、身一つでジャングルを超える勇気は俺にはない。
刀を手に持つ。人に見られたら銃刀法違反で捕まるかもしれない

が、今の状況を考えればそれ位のマイナス要素は受け入れるべき。後は、何の役に立つかは知らないが、一応コートを羽織っておく。まあ外は寒いし、防寒具の代わりにはなるだろう。

「よっと」

上手く歩けないから刀を杖代わりにして地面を歩く。歩きにくい。普段杖を突いている人たちはこんなにも苦労していたのか。日本に帰ったら、杖を持った老人に荷物を持つ手伝いとかしてみよう。こんな状態で荷物を持つのはしんどいだろうから。

金具部分が錆びているのか、中々開かないドアを力を込めて開く。外に出ると、広がっていたのは相変わらずの森。

それに少し辟易して、森の中に入っていく。木の小屋に帰る道を確保しておく為、途中通った木に刀で印を付ける。ベット以外何も役に立つ物がないあの場所に戻る可能性は少ないが、もしかしたらこの先人がいないかもしれないし、最悪のことを想定して寝場所は確保した方がいい。

十歩程歩いたら、鞘から刀を取り出して木に傷を付ける。そのような作業を繰り返しながら深い森の中を歩いていく。刀を杖代わりにして歩くことに大分慣れてきたせいか、感じた違和感もそれに呼応して段々と小さくなってきているのが分かる。何かが噛み合うような。そんな感覚だ。やっぱり、外に出て正解だったかもしれない。予想していた猛獣とかも出ないし。

やがて歩いていた時に感じる違和感も無くなり、刀を腰に括り付けたまま歩いていると、街のような建物の集合住宅が視界に入った。体内時計にして3時間くらいだろうか。疲れた。やっと着いた。結局猛獣とかには合わなかったな。まあ合わないにこしたことはない。運が良かったと思っておこう。後は、人に会って日本語か英語の通じる誰かに事情を話せば、万事解決だ。

危険だと勝手に思っていた森をあっさり抜けた安堵感からか、根拠の無い自信を胸に抱えて俺は街へ向かう。

現代日本では余り御目にかからない古風な街並み。

それはどこか新鮮で、此処が外国であるというを事実を改めて認識させられた。同時に日本へ帰りたい気持ちも……。

人と会うために余計な誤解を招きそうな刀をコートの内に外から見えないように隠して、街の入り口である門の前に行く。

入口となっている門の上側には看板があって、そこにはアルファベット文字で「北の海（ノースブルー）、マーラ島」と書かれていた。なんだ、これ。意味が分からない。どこの言語なんだ。というか、なんでローマ字なんだ。もしかして、これには俺の知らないフランスとドイツとかでの別の読み方があって、偶然日本語読みが成立しているのか。偶然に。

……疑問はもう一つある。もし日本語読みが正しいとするなら、北の海ってなんだ？　何処の海だ？　そんな海、地球上にあったか？

駄目だ。無理。全く予想が付かない。一旦考えるのは辞めよう。現実逃避だが、これにいたっては現実逃避して考えを保留しておくのも仕方ない。だって、仮にそうだとたら、この世界は……。

門を潜って、街に入る。取り敢えず、人だ。誰か人に会って、答えを探してみよう。整備されていない道路を歩く。街を外からみた時かたある程度分かっていたことだが、この街には人が殆ど外にいない。寂れているのか、何処か街の空気自体も閑散としている。

街は小さく、直ぐに街の反対側の門まで辿り着いた。どうする？

外に漏れる音から建物の中に人がいるのは分かるが、誰も出てこようとしない。他に街は何処にあるか分からないし、行き先が分かっても体力的にそろそろ限界だから無理だ。でも、帰る方法が分からないにしても、責めて此処が何処なのかだけは今知っておきたい。

色々悩んで、この街で一番大きな建物の前に立つ。この建物からは外にも漏れるような大きな笑い声が聞こえてくるので、此処に人がいることは間違いない。扉は少し開いていて、他の建物と違って気軽に入れそうだ。入るなら、この建物からだろう。

扉を開けて、建物の中に入る。

「ゲハハハハハッ」
店の中には、海賊のコスプレみたいな服を来た小汚ないオッサン達が酒を飲んで何やら話していた。日本語で。良かった。どうやら言葉は通じるらしい。街の住民が日本語を使っているという事実がどのような意味を持つのか深く考えず、彼らに話し掛ける。
「すいません」
「ゲハハッ、ゲハハハハハ」
俺が話し掛けていることに気付いていないのか、それとも気付いていて敢えて無視しているのか、それでも酒を飲んで笑っているオッサン達に今度はちゃんと聞こえるように割りと大きな声で話し掛ける。
「すいません」
「あ？」
すると、一番手前にいたオッサンが酒を飲むを止めて、ビールのジョッキを持ったまま俺を見て声を訝しげな声を吐いた。
「おえ」
ゲップと一緒に。うわっ、くさっ。最悪。……いや、今はそんなこと気にしている場合じゃない。下手なことを言って彼の機嫌を損ねても困るし。なんとか笑顔を保って再び話し掛ける。
「もし良かったら携帯電話を貸して貰えませんか？」
「あぁ？　何言ってんだ。てめえ」
「いや、えーと。もし良かったら電話とか貸して貰えたらなーと」
「はあ？　……なんだ、こいつ。おい、野郎共っ。頭のオカシイ餓鬼が一人紛れこんでるぞっ。痛みつけてやれっ」
いや、え？　な、なんで？　意味が分からいんだけど。
俺の聞き方が悪かったのか、それとも酒を飲んでいる最中に話しかけられたことが勘に触ったのかよく分からないが、オッサンは周りにいた男達に俺を痛みつけるに言った。
ニヤニヤと愉悦の笑みを浮かながら襲い掛ってくるオッサンA、B、C。

ちょっ、待て待て。マジか。なんだよそれ。唐突過ぎんだろ。
よく分からない展開に俺が動揺していると、既に目の前にはオッサンAの拳が顔の前まで迫っていた。うわっ。反射的に目を瞑る。無理だ。喧嘩なんて小学生の時ふざけてしただけで、こんなパンチ避けられるわけが。殴られるっ。

「――えっ」

一瞬の静寂。次いで上がったのは、驚きの声。
それは一体誰の物だったか。予想した一撃が来なかった俺か、もしくは自身の拳に何の感触も得られなかったオッサンか。はたまた、椅子に座って見物していた男達か。恐らく、全員だろう。何故なら俺の身体は霧のように霞んで、オッサンの拳をすり抜けたのだから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2657ba/

ＡＰ：０

2012年1月6日20時48分発行